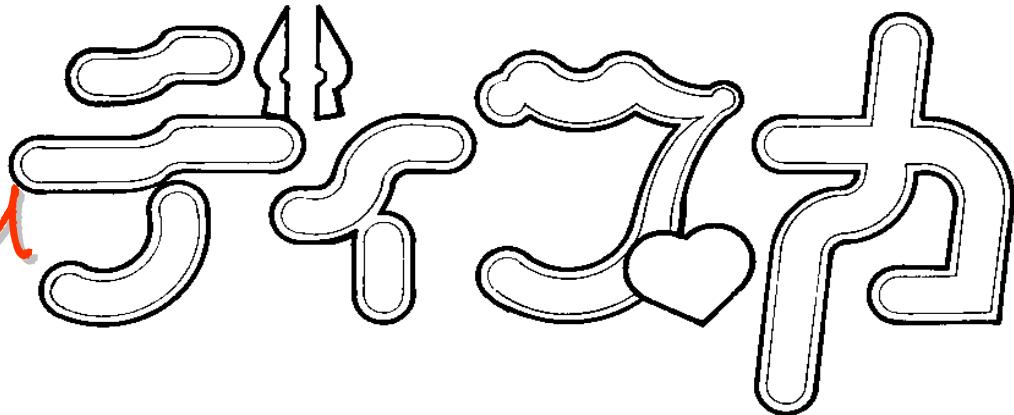


月刊  
JMITU



7月号

日本金属製造情報通信労働組合大田地域支部  
セガ グループ分会 2025年発行

No.487

# 正社員と非正規

## 構造的格差の実態

「同じ仕事、違う待遇…なぜ？」  
「雇用形態による格差」

近年、同じ職務内容にもかかわらず、雇用形態の違いによって待遇に大きな格差が生じている職場が数多く存在している。正社員と非正規社員（契約社員、派遣社員、アルバイトなど）の間で、賃金、賞与、福利厚生、昇進機会などに差があるのは、日本社会に根深く存在する課題の一つです。

厚生労働省の統計によると、非正規労働者は全体の約37パーセントを占め、特に女性や若年層でその割合が高い。にもかかわらず、同様の業務内容をこなしても、正社員に比べて賃金水準や雇用安定性が著しく劣るのが現状です。

近年、同じ職務内容にもかかわらず、雇用形態の違いによって待遇に大きな格差が生じていて待遇に大きな格差が生じる。正社員と非正規社員（契約社員、派遣社員、アルバイトなど）の間で、賃金、賞与、福利厚生、昇進機会などに差があるのは、日本社会に根深く存在する課題の一つです。

厚生労働省の統計によると、非正規労働者は全体の約37パーセントを占め、特に女性や若年層でその割合が高い。にもかかわらず、同様の業務内容をこなしても、正社員に比べて賃金水準や雇用安定性が著しく劣るのが現状です。

本来、業務内容が同一である以上、待遇にも公平性が求められるべきである。政府は「同一

労働同一賃金」の理念を掲げ、法制度の整備を進めてきているですが、実態としては例外規定や曖昧な運用が多く、格差は正には至っていません。企業側も正社員と非正規社員を同一業務を担当している場合も多い。たとえば、製造業やサービス業では、窓口対応や製品組み立てなど、非正規社員が正社員と同様の仕事を担つています。このような格差は、労働者のモチベーションや職場の一体感を損ない、生産性や定着率、エンゲージメントにも悪影響を及ぼす。待遇の不平等が社会的分断を生む前に、雇用制度そのものの見直しが必要です。

未来ある職場とは、雇用形態に関係なく、尊厳と公正が守られる環境であるべきで、同一労働同一賃金の徹底、公平な評価制度、キャリア形成支援の拡充など、持続可能な人材戦略が必要です。

「Ion1 ミーティング」は

必要か？

近年、多くの職場で導入されつつある「Ion1 ミーティング」。一人ひとりの声を聴き、成長を促す目的のはずが、現場では“制度疲れ”や“時間泥棒”との声も少なくありません。

そもそも、上司の対話スキルや関係性に左右されるこの制度は、形だけの運用では逆効果になりかねないです。準備不足のまま実施される面談は、単なる雑談で終わり、制度そのものが形骸化します。

また、全社員に定期的な面談時間を確保するには、業務への影響も避けられず、「やることが増えただけ」との不満もあります。そのうえ、誰がどう制度の成果を評価するのか不透明なままで、持続可能な運用は困難です。

## ひいじじ

仙洞田一彦

孫娘とは分からぬ。数年前に結婚式で顔を見たばかりだ。ましてあの時は、結婚式の化粧なのだから、普段と全く違

「おはようございます」

声が聞こえた。私は持つていた新聞をテーブルに置いて立ち上がった。本当なら、読んでいた新聞を、と書かなければならぬが、目は紙面に向いていたが、頭はそれどころではなかつた。孫娘が生まれたばかりの、ひ孫を見せることになつてからだ。

「どうぞ、どうぞ」

私は言つた。すると孫娘の夫だろう、半開きの扉を広く開けた。

「お邪魔します」

孫娘の夫が言つた。

夏だから玄関扉は半開きになつてゐる。扉の手前にあるカーテンを開けると、半開きの隙間から孫娘が顔をのぞかせた。

「おじいちゃん、朝早くからすみません」

あらかじめ電話がなければ、

こういう場合は冷たいジュースか何かだらうと思つて、コンビニで何種類か買つて来ておいた。

昼になつたら暑いから、涼しきうちにおいでとは言つておいた。うちに来るには軽の自家用車だから、行き帰りの暑さはあまり心配ないと思うが、朝の方が良いと思つたのだ。その通り、朝来た。私の娘、つまり目の前にいる孫娘の母親から、おじいちゃんに見せに行つて来なさいと言われたらしい。

孫娘の夫が言つた。孫娘の腕に抱かれた子は、まだ目が開いていないのか、眠つてゐるのか分からぬが、

「もう少し弱くして」

孫娘の言葉に、私はあわてて立ち上がり、エアコンのリモコンを取つて「何度」と聞いた。

「一回止めて」

孫娘が言つた。

「それなら、おじいちゃんが

生まれたばかりの子にどうすればいいのか分からぬ。

孫娘の親は、私の娘だが、その娘が赤ん坊のころはどうだったのか、思い出そうと思つても思い出せない。あの頃うちに冷房なんかあつたんだろうかとも思つた。

孫娘の言葉に、私はあわてて立ち上がり、エアコンのリモコンを取つて「何度」と聞いた。

「それなら、おじいちゃんが暑くて困るだらう」

孫娘の夫が言つた。

「これじや寒すぎ」

孫娘が言つた。

「え」と、孫娘の夫が言い、困つたような顔を私に向けた。

「いいの、いいの」

私はあわてて言い、リモコンの「停止」ボタンを押した。

「分からぬから、ジユースいろいろ買つてきた。冷蔵庫に入れてある。だから好きなもの出して」

私は孫娘に言つた。孫娘は、孫娘の夫に言つた。

「出してきて」「うん」

孫娘の夫は立ち上がつた。

「コップも出してあるからね」

私は孫娘の夫に言つた。

「はい」

夫は立ち上がり部屋を出て行つた。

「おじいちゃん、抱っこしま

す」

孫娘が、赤ん坊を差し出そ

うとした。私は手を出そうとして引つ込んだ。

「壊れてしまいそうで、怖い。

頬が見られればいい」

私が言うと、孫娘は抱いた

赤ん坊の顔を私の方に向けた。テーブル越しだが、顔が良く見えるようになった。

この子が私のひ孫か。

相変わらず目は閉じられた

まま。手も握りこぶしのまま。

親から私、私から娘、娘の娘からこの子。命がつながつて

いる。

私は父のふと漏らした言葉

を思い出した。父は中国大陸に兵隊として行つた。戦後ま

で生きられたが、当時の無理がたたり還暦の前に亡くなつた。

がな、爆発しなかつた」

「逃げられないし、食べるも

のもないし、自棄になつてな。

自爆しかないと思つて手榴弾を握り、爆発させた。ところ

がな、爆発しなかつた」

亡くなる直前だつたが、ふ

と、父が漏らした言葉だ。そ

して言つた。

「あの時、手榴弾が爆発していたら、お前はいなかつた」

当然だ。私は父が復員して

きた後、生まれたのだから。

その後私が読んだ本によると、

日本軍が持つていたというか持たされていた手榴弾は、半

分以上の六割が不発の粗悪品

だつたとか。別の本には、銃

もなく手榴弾だけを持つての

逃亡も描かれていたり、飢え

死にも相当いたらしいことも

書かれていた。閉塞感から誘

導された、侵略戦争の結果の

死ではないのか。

「だがな、お前が生まれたと

き、生きていてよかつたと思つたよ。命がつながつたからな」と、父は言つた。

爆発していたら、私もいな

いし、目の前のひ孫だつてい

ない。ひ孫の顔をあらためて

見た。笑顔ならもつといいか

もしれないが、目は閉じられ

たままで十分いい。

自棄になることなんて、人

生、誰にでもあることじやな

いか。それも一回や二回では

ないだろう。閉塞感に襲われ

ると、どうにもならず、當る

ところを見つけて自棄を爆発

させる。

私だつて失恋したとき、ど

う生きればいいのか分からな

くなつたこともあった。もし

あの気持ちに襲われたとき、

目の前が断崖絶壁だつたら、飛び降りていたかもしれない。

さいわい断崖絶壁でもなければ、高層ビルの屋上にいたわけでもなかつた。彼女と別れて、ごくごく普通の道、住宅街をとぼとぼ歩いていた時だつた。あるとすれば、赤信号を飛び出して、走つて来るト

ラックの前に身を投げ出し、運転手に迷惑をかけるくらいのことか。こんなことを言つたら、父から「俺のような、生死の境目の場合と一緒にするな。甘つたれるな」と叱られそうだが。

新聞を時折にぎわせている、

誰でもいい、二人以上殺して死刑になるんだなどと言つて刃物を振り回すのだつてそうだ。人それぞれ訳はあるのだろうが、明日も生きようとす

る気持ちが塞がれたときだろ

う。そんなときの八つ当たり。

実際にそうすると、しないと

では大きな違いがあるが、瞬間、そんな気分に襲われることは誰でもあるに違いない。

「おじいちゃん」

孫娘から言われて、我に返つた。

「なに」

「近くにコンビニありますよね」

「あるある、道を出たとこに」

「買って来て」

見るとふすまを開けて、孫娘の夫が顔を出している。

「うん」

という声を残してふすまが閉められた。

「飲みたいのがなかつたらしいから」

「そうか」

若い人の好みは分からぬ。

私はまたひ孫の顔に視線をや

つた。

元気な孫娘だつて、そんな気持ちに襲われたことがあるだろう。でも、こうしたかわいい赤ちゃんがいるんだ。生

きて来たからだよ。命がつながつた。

「ね」

私が赤ん坊に、念を押すようには話し掛けた。

「え、なんですか」

孫娘が言つた。

「生まれてよかつたねつて、赤ちゃんに言つたんだよ」

私が言つた。

「そうですよ、ねえ」

孫娘は、抱いたひ孫、赤ん

坊の両手を、振るように動かし、赤ん坊の代わりの口調になつて答えた。孫娘は、その

手を動かしながら、私の顔を見ると聞いた。

「私の場合はおじいちゃんでいいでしようけど、この子から言うと、おじいちゃんのことは何というの」

そう答えると、孫娘は赤ん坊に視線を落として言つた。「ひいじじだよ、ひいじじだつてよ。なんかおかしいね、ひいじじなんて」

ひ孫の目は閉じられていたままだつたが、私はテーブルの上に身を乗り出すようにして、ひ孫に言つた。

テーブルの上に置かれた新聞には「若い世代の閉塞感、選挙結果に反映か」の見出しが見えていた。